

## 2022 年度前期 大学院授業改善のためのアンケート

### <文学研究科長・専攻代表からのコメント>

#### ■文学研究科長 土肥 伊都子

自己点検・自己評価のための参考資料となる大学院授業アンケートは、匿名性を保証するために、専攻の区別なく文学研究科の全院生からの回答をまとめて収集している。そのため、教員も専攻代表も、いわば間接的に自身の授業を振り返るきっかけという意味でのアンケート結果となっている。これを踏まえて、各専攻代表からのコメントをまとめ、研究科全体としての評価をしたい。

まず、どの専攻代表からも、各専攻では、ねらい通りの授業を行っているという自負が高かった。これは各教員がコロナ禍にあっても柔軟に、また院生数が少なくとも熱のこもった、そして資格取得などを見据えた様々な授業運営での工夫により、大学院生の主体的な学びを後押しするように努められたことの結果であろう。今後もこうした授業運営を続けてほしい。

気になる点としては、第1に、心理学専攻代表からのコメントにある、各教員が受講生のためと思って課題を出すことが、院生からすると過負荷になっていないかという懸念である。今後はより院生の立場に立って、院生に課している課題・実習時間などの量を教員間で調整することを試みて頂きたい。

第2に、国語国文学専攻代表からのコメントにある、ミスコミュニケーションの発生可能性である。院生にとっては教員への異議や要請はしにくいものである。このことを常に念頭において院生とのコミュニケーションを行ってほしい。

第3に、大学院生の健康の問題である。持病をはじめ、院生生活での学習環境やストレスにより健康を損なってしまう院生がいなくなるよう、また今後も現れないよう、細やかな配慮をして頂き、小規模校ならではの利点を生かしてほしい。

#### ■英語学専攻代表 Philip Spaelti

The evaluations returned have mostly quite high scores, which is a positive result. However since only two of the 17 returned evaluations are from English major students we must be careful in interpreting the results. Among the specific comments, students mentioned the advantage of being in a small class, which makes it possible to focus on their needs.

Teachers also mentioned that having few students made it possible for them to adjust the content to the students' needs.

One particular issue that affected the English major was the fact that one of the students has health issues which lead to her being absent quite often. This was noted as an issue by several teachers.

This year required both new curriculum and some old curriculum to be taught in the English major.

## ■国語国文学専攻代表 田附 敏尚

各担当の自己点検評価を概観すると、一方的な知識の教授だけに陥ることなく、学生に考えさせる、教員も交えて議論する、発表させるというように、双方向的なコミュニケーションを心がけつつ、アクティブラーニングを志向する傾向が見て取れた。また、それに伴い、柔軟な授業運営を展開しているケースも見受けられた。受講生も各授業で活発に発言しているようで、それぞれ熱のこもった授業が繰り広げられている様子を感じられた。

学生による授業評価を見ても、さまざまな項目で大半は良い評価を下しており、全般的には問題がないように見られる。

ただ一方で、これは本専攻に限ったことではないが、様々な項目において5段階で3をつける学生が一定数存在しており、その点はまだ改善の余地がありそうである。これについて、学生のコメントや担当者の自己点検評価票などから判断すると、実はミスコミュニケーションが発生している可能性もありそうである。コミュニケーションは相互の問題であるとはいえ、授業運営する教員側の責任は大きい。教員は普段からミスコミュニケーションが起きていないか確認する必要がある。

また、授業を柔軟に展開することは必ずしも悪いことではないと考えるが、柔軟に展開しすぎて、どの“道”を歩いているのか受講生が“迷子”になることがないようにする必要もあろう。例えば各回（あるいは連続する数回）において、何を目標に授業が進んでいるのか、指針やゴールといったものを設定するなど、その授業を学ぶ意味を受講生が感じ取れるようにすべきだと考える。学生の成長を第一に考え、専攻としてできることは改善していきたい。

## ■心理学専攻代表 小松 貴弘

各教員の振り返りからは、どの授業科目においても、授業のねらいと目標はおおむね達成されたことがうかがわれる。現在の心理学専攻は臨床心理学コースのみであることから、臨床心理士あるいは公認心理師の受験資格に関わる科目以外を担当されている教員の方々も、授業内容を臨床実践に関連づけることを意識していることを読み取ることができる。また、多くの教員が、受講生と教員との間の、また受講生同士の間でのディスカッションの活性化、および受講生が意見を述べやすい授業運営に努めていること、そしてその努力が実を結んでいる手応えを感じていることが読み取れる。

一方で、依然としてコロナ禍が続く中で、授業科目によっては、授業の運営に一定の制約がかかり、代替的手段を工夫して授業を実施するケースがあったこともうかがわれる。コロナ禍の中で、学びの内容の点で受講生に及ぶ影響を最小限にするための工夫は、もうしばらく続けざるを得ないように思われる。

大学院の授業は、学部の授業と比較して、受講生の主体的な学びの姿勢がより強く求められるため、その方法の一つとして、受講生にテーマを指定して文献調査とその報告を求める授業運営が多くなりがちである。このことに関連して、各授業科目単位ではなく、専攻全体として受講生の課題の負担量を考慮することや、受講生の文献調査の方法への指導の必要性を指摘する意見があることについては、今後、専攻全体として共有して議論することを検討したい。